



映画批評

『ダ・ヴィンチ・コード』

～ 隠された暗号、レオナルド・ダ・ヴィンチの絵の中の謎～

塚田三千代

(翻訳家・映画アナリスト)

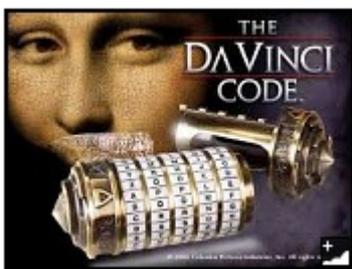
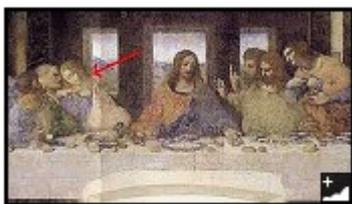
©m.tsukada

なによりも本映画の面白さは、映画の映像によって原作では難解な内容を鑑賞者に親しみ易く身近に感じさせ、ヨーロッパ文化の原点に親しむ手引きになっている点である。小説にはコード解説やアナグラム解説、教会や歴史建造物、レオナルド・ダ・ヴィンチの名画やルーブル美術館内部、宗教伝説(聖杯伝説)、スイス/チューリッヒ保管銀行の顧客対応、エディンバラ近郊のロスリン礼拝堂、等々が多数の頁にわたって書かれているが、読んでもピンとこないところがある。そこが本映画で一目瞭然と理解できる。

ロバート・ラングドン教授はルーブル美術館・館長殺人の謎を解くためにインターポール＝フランス司法警察中央局に依頼されたにもかかわらず、館長殺人容疑者として、フランス警察から追われる側になってしまう。館長の孫娘でインターポール所属の暗号解読官のソフィー・ヌヴェーに助けられて、危機一髪のところを深夜のルーブル美術館から脱出でき、追っ手をまいて難所をなんとか突破して、ダ・ヴィンチ・コード(宗教的象徴記号の一種)/フィボナッチ数列を解読する。そしてイエス・キリスト聖杯の保管場所を探し求めて追跡をふりきり、ついにロスリン礼拝堂へたどり着ける。ところがなんとそこはソフィーの祖先を埋葬している場所(教会の地下にある墓)である。ソフィー・ヌヴェーはメロヴィング王家の後裔であった。

そこへの通路は「the keystone = the cryptex」のコード解読が鍵となって、このロスリン礼拝堂までの順路を発見できたのである。ルーブル美術館を後にしたロバート・ラングドン教授とソフィー・ヌヴェーはリー・ティービング宅へ、そして、アップル・マーク→ニュートンの重力発見のヒント→アイザック・ニュートンの墓(*ニュートンはシオン会の総長)→エディンバラ近郊のロスリン礼拝堂へ辿りついたのである。

ところで、本映画中盤でイギリスの宗教史学者でナイトの爵位を持つ男としてリー・ティービングが登場する。彼は聖杯の歴史とシオン修道会伝説にとりつかれており、レオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」を指して、聖杯の秘密はこれだと言って、マグダラのマリアとイエスの構図を解説するのだが、彼の説は学術的な根拠として世間で公認されていないとしても、推論としては一理あって面白い。



映画のセリフ

ソフィー・ヌヴェーが祖父を回想して話す。

① "It's a cryptex. Da Vinci's design. Saunière made me one for my birthday once." "My grandfather gave me a wagon."

ロバート・ラングドンがキー・ストーンを説明する。

②”There was every orb conceivable on that tomb except one: The orb which fell from the heavens and inspired Newton life’s work. Work that incurred the wrath of the church until his dying day. A-P-P-L-E. Apple.”

【映画史リテラシー】

●言語: 英語 仏語 スコットランド語 専門用語(数字・アナグラム)

●ルーブル美術館: 宗教画に隠された暗号(コード) ・聖杯の地図 ・「最後の晩餐」の構図を読み解く
新説: マグダラのマリア ・シオン修道会 ・オプス・デイの修道士 ・フリーメイソン ・インターポール ・
建築物やルーブル美術館の内部構造、等に見る中世ヨーロッパ文化

●登場人物

ロバート・ラングドン(ハーヴァード大学教授で宗教象徴学専門家 Professor Robert Langdon:
American religious symbolist)

ソフィー・ヌヴー(フランス警察の暗号解読官 cryptologist)

リー・ティービング(イギリスの宗教史学者でナイトの爵位を持つ)

ベズ・ファーシュ(フランス司法警察中央局警部)

ジャック・ソニエール(ルーヴル美術館館長でソフィーの祖父)

シラス(オプス・デイの一員となり殺し屋で色素欠乏症 Silas: Opus Dei member)

●場所: パリ ロンドン スコットランド ルーブル美術館 エッフェル塔 サン・シュルピ
ス教会 ウェストミンスター寺院(*Sir Isaac Newton’s tomb / the main keys to solve the
Holy Grail’s mystery.) ナショナルギャラリー キングズ・ガレッジ資料館 テンプル教
会 ロスリン礼拝堂

●本映画は『天使と悪魔』(2003年)に次ぐ「ロバート・ラングドン」シリーズの第2作である。

原作はダン・ブラウンの小説。ロバート・ラングドン(宗教象徴学専門家)シリーズの第1作が「天使と悪魔」(2000)で、第2作が「ダ・ヴィンチ・コード」(2003)であるが、映画は最初に『ダ・ヴィンチ・コード』(2006)が製作され、続いて『天使と悪魔』(2009)が製作された。

●ロスリン礼拝堂聖遺物や聖杯を巡って確執する人物の新説には学術的根拠は全くないと言われている。

●アドベンチャーゲームとして、Micros 宗教 oft Windows、PlayStation 2、Xbox でゲーム化されている。

●DVDチャプタ:

1. オープニング
2. シラスの報告
3. ダイニング・メッセージ
4. “ラングルトンを捜せ”
5. アナグラム
6. “先へ進むな”
7. 影の評議会
8. 10 桁の口座番号
9. 銀行からの脱出
10. リーの屋敷へ
11. 人間から神へ
12. 聖杯の秘密
13. キー・ストーン
14. 逃亡
15. バラの下
16. イギリス到着

17. 裏切り 18 ポープが葬った騎士 19 リーの正体
20. 壊れたクリプテックス 21 ロスリン礼拝堂 22 王家の血
23. 何を信じるか 24 ひざまずく騎士

[映画情報]

・第 59 回カンヌ国際映画祭でオープニング作品として上映された。

区切線

© 2013 m.tsukada. All Rights Reservd.